2000年（平成12年）10月10日発行　第246号　（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）

教皇様の聲 10 246号

Libreria Editrice Vaticana,Citta del Vaticanoの転載許可済 2000

キリストと気高い理想

［世界青年の日に行なわれたごミサでの説教。］

1　「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」（マタイ16・15）

皆さん、この徹夜祭で再びお会いできたことを心から喜んでいます。この徹夜祭では一緒に、すぐそばにおられるキリストに耳を傾けたいと思います。私たちに話しかけてくださるのはキリストご自身です。

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき弟子たちにこう尋ねました。「あなたはメシア、生ける神の子です。」（マタイ16・16）とシモン・ペトロが答えると、主はペトロの方を向いて驚くべき言葉でお答えになります。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。」（マタイ16・17）

この対話が意味することは何でしょうか。なぜイエスは人々が自分のことをどう考えているか知りたかったのでしょう。なぜ弟子たちが自分のことをどう思っているか知りたかったのでしょうか。

弟子たちが心に隠れていることに気付き、それを表明することをイエスは望んでおられるのです。同時に、弟子たちが表明することは、弟子たちだけの考えではないということをイエスはご存じです。なぜなら表明されるのは神が信仰のお恵みによって弟子たちの心に注がれたものだからです。

フィリポ・カイサリア地方でのこの出来事は、私たちを「信仰の学校」に導いてくれるとも言えます。そこでは、私たちの信仰の起源と発展の秘義が明らかにされます。まず初めに啓示の恩恵があります。つまり深く言葉では言い表わすことのできない神の献身のことです。それから応えを求める呼びかけが続き、最後に私たちからの応えが来ます。その呼びかけに応えることによって、私たちの全生涯には明確な形が与えられ意義がもたらされるのです。

使徒たちの信仰の学校

これが信仰です。信仰とは、生きた神のみことばに対して人間が理性的に自由に応えることです。イエスが尋ねる質問には、使徒たち、最後にシモン・ペトロが答えますが、これはキリストの最も近くにいる人々の信仰の試験のようなものです。

2　フィリポ・カイサリア地方でのこの会話は、過ぎ越しを待つ間、つまりキリストの受難と復活の前に行なわれました。また、もう一つの出来事を思い起こすべきでしょう。復活したキリストが使徒たちの信仰の成熟度を調べる時のこと、使徒トマと出会う時のことです。キリストが復活の後初めて高間に現われた時、トマだけがそこに居合わせていませんでした。他の弟子たちが高間でイエスと出会ったことを聞いても、トマは信じようとしませんでした。トマは言います。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」（ヨハネ20・25）一週間後、弟子たちは再び集まり、その時はトマも居ました。イエスは閉ざされたドアを通り抜け、次の言葉で使徒たちにあいさつします。「あなたがたに平和があるように。」（ヨハネ20・26）そしてすぐにトマの方を向いて言われます。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。またあなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」（ヨハネ２０・２７）トマは答えます。「わたしの主、わたしの神。」（ヨハネ20・28）

エルサレムの高間も使徒たちにとっては「信仰の学校」のようなものでした。けれどもトマに起こったことは、フィリポ・カイサリア地方での出来事を越えるものだと言えます。高間では信仰と不信仰との徹底した対立があります。また同時に、キリストに関する真理のより深い告白をも目にします。確かに、三日前墓に納められた人が生き返ったことを信じるのは容易なことではありませんでした。

神である師は、死後復活することを何度か告げ、様々な方法でご自分が命の主であることを示していました。しかし、イエスの死の体験は大変なことだったので、人々がイエスの復活を信じるためにはイエスと直接会う必要がありました。高間での使徒たち、エマオへ向かう弟子たち、墓での聖なる婦人たち、そしてトマもまた、イエスと直接出会うことが必要でした。しかし、トマの不信仰がイエスの出

現に直面したとき、疑っているトマが信仰の最も深い核を表わす言葉を発します。もしこれが真実なら、殺されたにも関わらず本当に生きているのなら、あなたは「わたしの主、わたしの神」です。

トマに起こったことにおいて、「信仰の学校」は新しい要素で豊かになります。神の啓示とイエスの質問、人間の応えは復活して生きるキリストと弟子たちが個人的に出会うことで終わります。この出会いは、私たち一人一人とキリストとの新しい関係の始まりです。その関係の中で、一人一人がキリストは神であり主であるというきわめて重要な事実に行き着きます。そしてキリストは、この世界と人間の神であり主というだけでなく、私の個人としての人間の命の主でもあります。ある時、聖パウロは次のように書き記しています。「『御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。』これはわたしが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。口でイエスは主であると公に言い表わし、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」（ローマ10・8～9）

3 今日の典礼の朗読では、完全に真理に目覚めた使徒たちの「信仰の学校」の要素が描かれています。そしてその真理とは、神がイエス・キリストにおいて啓示された真理、歴史を通して個人の生活と教会の生活を形作る真理のことです。皆さん、ローマでのこの集まりもまた、現代のキリストの弟子である皆さんにとっては「信仰の学校」です。三千年期の始まりにキリストを宣べ伝えるすべての人にとって「信仰の学校」なのです。

聖霊に心を開く

これまで話してきた質問と答えのいきさつを皆さんは感じ取ることができるでしょう。皆さんは自分が信じていることの難しさを測ることができます。そして信じないという誘惑さえ感じるかもしれません。しかし同時に信仰への責任に対する認識と確信が徐々に成長することを感じ取ることもできるでしょう。実際に人間の霊魂という素晴らしい学校、信仰の学校では神と人間との出会いが常に起こっています。復活したキリストはいつも私たちの生活の高間にお入りになり、私たちがその存在を感じ取ってこう宣べ伝えることをお許しになります。キリストよ、あなたは「わたしの主、わたしの神」です。

キリストはトマにおっしゃいました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」（ヨハネ20・29）使徒トマのようなことは誰にでもあります。誰もが不信仰の誘惑にかられて基本的な質問をします。神は本当に存在するのだろうか。神が世界を創ったというのは本当なのだろうか。神の御子が人となり亡くなって死者の中から復活したというのは本当だろうか。答えは神の存在を個人的に体験する時出てきます。私たちは心と目を聖霊の光に向けなければなりません。そうすれば、復活したキリストの開いた傷がそれぞれに語り掛けるでしょう。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

4 皆さん、今日イエスを信じるためには、またペトロやトマ、初めの使徒や証人たちのようにイエスに従うためには、時として新たな殉教に至るまでイエスのために戦うことが要求されます。昨日のように今日も殉教者は聖なる主に従うためそして「小羊の行くところへは、どこへでも」（黙示録14・4）ついて行くため流れに逆らうよう求められています。皆さん、この聖年にコロセウムで、二十世紀の信仰の証人が思い出されるよう私が望んだことは偶然ではないのです。

おそらく皆さんが血を流す必要はないでしょう。けれども、皆さんは確かにキリストに忠実であるよう求められています。日常生活の出来事の中で信仰を忠実に生きるということです。今の世の中で、婚約した二人が結婚の前に清らかさを守ることがどんなに困難であるか考えています。若い夫婦の結婚への忠実がどのように試みられているか、友情について、また忠誠心に対する誘惑がいかに簡単に入り込んでくるかについても考えています。

特別な奉献生活を選んだ人々が、神と兄弟姉妹への献身を守るためどんなに努力して闘わなければならないかということも思いめぐらします。どうやって得をするかということや、個人や団体の利益が唯一の重大事だと思われている世の中で、連帯と愛の生活を生きたいと思う人々のことを心に留めています。

平和のために働きながらも、世界の様々な場所で新たに勃発する戦争や、ますます深刻な状態に陥っていくのを目にする人々、人間の自由のために働くけれども、いまだに自分自身を、そしてお互いを奴隷のように見なす状態を見なければならない人々、人間の生命に対する愛と尊敬を確かなものにするために働く人々、休まることのない生活を送り、敬うべき生命が攻撃されるのを目にしなければならない人々のことを考えます。

私たちの心を駆り立てる

5 若い皆さん、このような世界で信じるということは困難でしょうか。三千年期において信じることは難しいことなのでしょうか。そうです、難しいことです。信じることが簡単ではないということを隠す必要はありません。困難ではあるものの、イエスがペトロに言ったように恩恵の助けによって信じることができます。「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。」（マタイ16・17）

この夕暮れどきに私は皆さんに福音を与えることに

(昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可)

なっており、またそうするつもりです。この忘れられない徹夜祭での教皇から皆さんへの贈り物で、そこに含まれている言葉はイエスのものです。祈りの中で静かに耳を傾けるなら、そして司祭や教師からの賢明なすすめを参考にしてイエスの言葉が皆さんの生活にとってどんな意味があるか理解するための助けを得るなら、キリストと出会い、キリストに従い、日々の生活をキリストのために費やすことになるでしょう。

実際、幸せを夢に描くとき、求めているものはイエスです。何も満足できるものがないと気付くとき、イエスは皆さんを待っていてくださいます。イエスは心を引きつける美であり、妥協を許さず完全さへの乾きで皆さんを奮い立たせるのもイエスです。イエスは誤った生活の仮面を脱ぎ捨てるよう促し、皆さんの心にある本当の選択、他の人々はもみ消そうとする選択を読み取られます。人生において何か偉大なことを成し遂げようという望みを駆り立てるのはイエスです。理想に従う意志、周りに流されることを拒み、謙遜に忍耐をもって自分を委ね、自分自身と社会を改善し、世の中をより人間的に親密なものにする勇気を与えるのはイエスなのです。

皆さんはこの気高い仕事をするにあたって一人ではありません。皆さんのところには家族や社会の人々、司祭や教師、キリストを愛し信じることに決して飽きることのない深い心を持つ人々がいます。罪に対する闘いの中でも一人ではありません。多くの皆さんのような人々が闘いそして主の恩恵を通して勝利しているのです。

6 三千年期の幕開けにおいて、皆さんの中に「夜明けの見張りの者」（イザヤ21・11～12参照）を見ています。今は過ぎ去ったこの百年の間に、皆さんのような若い人たちがたくさん集まって、憎しみを学び互いに争うために送られました。様々な神抜きの救済組織がキリスト教的希望に取って変わろうとしましたが、いずれも実に恐ろしい姿を露呈しました。今日皆さんは共に集まり、二十一世紀に暴力や破壊の道具とならないことを宣言します。皆さんは平和を守り必要ならば自ら代償を払うでしょう。皆さんは、餓死したり、読み書きができなかったり、仕事がない人々がいる世界に甘んじることはないでしょう。人間成長のどんな段階においても生命を守り、これまでにないほどこの地球が全ての人にとって住み易いものとなるよう全力を注いでください。

新しい世紀における若い皆さん、キリストに「はい」と応え、気高い理想を受け入れてください。キリストが皆さんの心と二十一世紀、三千年期の全ての人々の心を支配なさるよう祈ります。イエスに自分自身を委ねることを恐れないでください。イエスは皆さんを導き、いつでもどんな状況においても従うことができる力を与えてくださいます。

おとめマリアは全生涯を通して神に同意してきました。聖なるマリア、聖ペトロとパウロ、どんな時代も教会の旅路を照らしてきた全ての聖人が、この聖なる決意に忠実であるよう皆さんをお守りくださいますように。

皆さん一人一人に心からの祝福を送ります。

(・・・)歓声と拍手で何度も中断したこの対話を皆さんに感謝しています。皆さんの積極性と知性によって、独白ではなく真の対話となりました。(・・・)

皆さん全員、特に後ろの方で何も見ることができなかった人々にもう一度あいさつします。(・・・)皆さんの叫びはローマを襲い、ローマはこの叫びを決して忘れることはありません。

(2000.8.19)

私に従いなさい

〔聖地コラジン巡礼で若い人々に向けられたお話。〕

「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。」（1コリント1・26）

1 今日、聖パウロのこの言葉が、山上の説教が説かれたこの場所に集まっている私たちに向けられています。（・・・）イエスの声はこの国のような優しさで語りかけると同時に、生と死の選択を強く迫る声でもあります。

私たちより前に幾世代の人々が、山上での説教に深く動かされたことでしょうか。何世紀もの間どれほど多くの若い人々が、今日ここに集まっている皆さんのようにイエスのもとに集まり、永遠の生命についての教えを学んできたことでしょう。どれほどたくさんの若い心が、イエスの人柄の力に駆り立てられ、人を引きつけるその教えの真実さに奮起させられたことでしょう。皆さんがここに集っているのは素晴らしいことです。（・・・）

2 イエスはお話しになります。「幸いな者よ、心の貧しい者、柔和で憐れみ深い者に祝福を。苦しんでいる者、義に飢え渇く者、心の清い者、平和を実現する者、義のために迫害される者は幸いである。」しかし、イエスの言葉は奇妙に思えるかもしれません。イエスが、一般的に社会が弱い者と見なす人々を賛美するのは不思議なことです。イエスは弱い人々に向かっておっしゃいます。「敗者のように思

える者は幸い。そのような人々は本物の勝利者だからです。天の国は、本物の勝利者のものです。」「柔和で謙遜」（マタイ11・29）なイエスがこうお話しになると、これは、霊魂の深い永続的な改心、大きな心の変化を要求する言葉となります。

若い皆さんならこの心の変化がなぜ必要かがわかるでしょう。皆さんは心の中や皆さんの周りにあるもう一つの声、矛盾の声に気付いているからです。それは次のような声です。「幸いな者、高慢と暴力の人、どんな犠牲を払っても成功する者、無節操で哀れみなくひねくれた者、平和ではなく争いを起こし、自分たちに抵抗する人々を迫害する者は。」この声は、暴力がしばしば勝利を得、ひねくれた者が成功する世界で、筋が通っているように思えます。悪の声は続きます。「そうだ。勝利を得るのはそのような者たち。何と幸せな者。」

3 イエスは全く異なる言葉を示します。まさにこの場所から遠くない所でイエスは最初の弟子たちをお呼びになりましたが、同じように今は皆さんをお呼びになっています。イエスの呼びかけは常に選択を求めています。今もこの丘の上で皆さんの心の中で戦っている二つの声、善と悪、生命と死から一つを選択するよう求めておられます。二十世紀の若い皆さんはどちらの声に従うことを選びますか。イエスを信じるとは、それがどんなに変わったものに思えても、イエスの言葉を信じる方を選ぶということです。また、悪の主張がいかに理にかなった魅力的なものに見えても、それを拒絶するという選択です。

結局、イエスは至福八端の教えを単に語るだけに留まらず、その教えを生きることになります。イエスは至福八端そのものなのです。イエスを見れば、心が貧しいということがどのような意味かわかるでしょう。柔和で憐れみ深く、苦しんでいる者、義に飢え渇き、心の清い者、平和を実現する者、義のために迫害されることの意味もわかってきます。だから、イエスには「来て、私に従いなさい。」と言う権利があるのです。イエスは単に「私が言うことを行なえ」と言うのではなく、「来て、私に従いなさい」とおっしゃいます。

皆さんはこの丘でイエスの声を聞きその言葉を信じています。しかしガリラヤの海での最初の弟子たちのように皆さんも舟と網を捨てなければなりません。それは決して簡単なことではありません。不確かな将来に直面した時やキリスト教徒の信仰を失う誘惑に遭う時は特に難しいでしょう。今の世の中で良いキリスト者であることは、私たちの力を越えることのように思えるかもしれません。しかしイエスは、困難に遭う私たちを傍観されたり、皆さんを独りにされることもありません。イエスはいつもそばにいてくださり、私たちの弱さを強さに変えてくださいます。イエスの言葉を信用してください。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」（2コリント12・9）

4 使徒たちは主と時を過ごしました。弟子たちは、主を知り深く愛するようになり、使徒ペトロがイエスに語った言葉の意味を発見します。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」（ヨハネ6・68）使徒たちは永遠の命の言葉とはシナイ山の言葉であり、至福八端の教えであることを知るのでした。そして、使徒たちがあらゆる場所へ伝えたのはこの教えです。

ご昇天の時、イエスは弟子たちに使命を与え、次のことを再確認されました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。... わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ28・18～20）二千年間、キリストに従う者たちがこの使命を実行してきました。三千年期が始まる今、今度は皆さんの番です。十戒と至福八端を伝えるために皆さんが世界へ出かけて行く番なのです。神はお話しになる時、一人一人にとって最も大切なこと、一世紀の人々と同様二十一世紀の人々にとっても大切なことをお話しになります。十戒と至福八端は真理と善、栄光と自由を語り、キリストの国に入るために必要なことすべてを教えます。今こそ皆さんがキリストの国の勇気ある使徒となる番です。

聖地の若者の皆さん、世界の若者の皆さん、主に応えてください。積極的で大きな心で主に応えるのです。ガリラヤの素晴らしい娘、イエスの母であるマリアのような積極的で率直な心です。マリアはどのように応えたでしょうか。マリアは次のように言いました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」（ルカ1・38）

主イエス・キリスト、(･･･)若い人々といつも共にいてください。特にあなたや福音に従うのが難しく苦しい時そばにいてください。あなたが力となり勝利となるでしょう。

(2000.3.24)

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■**定価**：送料とも一部186円　■**年内定期購読**：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会
＊電話受付時間は火･木曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00となっています。